シニアタウン化した住宅地における
居住ネットワークの構築と地域コミュニティの形成別荘地と定住地の二面性を有するシニアタウン化した住宅地における
高齢者の居住環境に関する研究 その2CONSTITUTION OF RESIDENTIAL NETWORKS AND FORMATION OF
REGIONAL COMMUNITIES AT SENIOR CITIZENS' TOWNSA study on the residential environment of elderly settlers of a residential area that changed into a town for
senior citizens and that has bilateral character of a villa and settlement Part 2

竹田 喜美子*, 番場 美恵子**

Kimiko TAKEDA and Mieko BAMBA

The purpose of this study is to investigate from the perspective of social relations how elderly settlers who moved into senior citizen towns formed safe and secure regional communities, namely, residential networks based on both region and family. The authors were able to clarify the following: 1) communities were jointly formed by both the residential system described in part 1 of this study and regional networks; 2) good social relations were seen when residents shared a wide range of communication patterns, from general to intimate; the authors define this as "Flat Communication"; and 3) a key person was essential for the formation of good social relations.

keywords: *Villa, Settlement, Town for senior citizens, Residential network, Regional network, Regional community*
別荘地, 定住, シニアタウン, 居住ネットワーク, 地域ネットワーク, 地域コミュニティ

1. はじめに

1-1 研究目的

伸長する高齢期の過ごし方のひとつとして、住み慣れた土地から自然環境に恵まれた土地への移住を選択し、第二の人生を過ごそうと考える高齢者が増えている。そしてそれらの場所が結果的に、高齢者が集まって暮らす「シニアタウン化した住宅地」になる場合もある。本研究は、別荘地と定住地の二面性を有するシニアタウン化した住宅地に定住する高齢者を対象に、その居住様態を多角的に分析し、高齢者の自立生活及び居住継続を保障し、住宅地として持続可能な居住環境に関する知見を得ることを目的とする。

前報その1では、＜ハード面＞体制から、居住者組織、管理会社、共用施設による「居住システム」が必要であることを究明した。本報その2では、＜ソフト面＞人間関係から、「居住ネットワーク」について考察する。近年、急激に進んだ個人化に歯止めがかかり、改めて人々のつながりが見直されている。他者とのふれあいによって、活動の活性化、生きがい、日常および非常時の助け合いなどが誘発されるが、これらは高齢者の生活にとっては特に重要といえる。退職による社会との接触低減、身体機能の低下などにより、身近な繋がり、つまり親子関係、近隣関係がその拠り所となる。新たな地に移住した高齢者は、新しい居住ネットワークの構築を迫られる。親子関係である「家族ネットワーク」は移住によりその関係に変化が生じ、近隣関係である「地域ネットワーク」はゼロからのスタートとなる。

充実した生活を過ごすために必要な居住ネットワーク、特に地域ネットワークを中心に、構築のプロセスに焦点をあて、地域ネットワークと居住システムの相互関係を分析することにより、居住の安心と安全を確保するための地域コミュニティの形成要件を考察することが、本報の目的である。

1-2 研究方法

研究方法は、アンケート調査から量的傾向を分析し、ヒアリング調査から質的傾向を把握する形を採る。研究内容は以下に示す通りである。「居住ネットワーク」を家族ネットワークと地域ネットワークに二分し、家族ネットワークでは、移住後の親子関係の変容を把握する。地域ネットワークでは、①移住後の生活で中心となる趣味活動とボランティア活動に関する動向を分析する。②新たに築かれる地域ネットワークの構築プロセスを明らかにし、地域における交流傾向を探る。③さらに個人別に交流パターンを特定し、地域ネットワークの実相を把握する。④対象地の特性別に交流パターンを分析し、地域コミュニティの形成に大きな役割を果たすキーパーソンの成立条件を解明する。

なお、3箇所の調査対象は、高原にある開発90年の歴史を持つ高級別荘地の千ヶ滝、海浜にある開発40年になる大衆別荘地で居住区が散在しているかしま野、新しくシニアタウンとして開発されて10年になる美奈宜の杜、である^{注1)}。それぞれの地域の特性に応じて居住ネットワークについてみていく。

* 昭和女子大学 名誉教授・博士(学術)

** 昭和女子大学環境デザイン学科 専任講師・博士(学術)

Prof. Emeritus, Showa Women's University, Ph.D.

Lect., Dept. of Environmental Science and Design, Showa Women's University, Ph.D.

表1 調査対象

調査地	所在地	総面積 (万㎡)	総区画数	建築戸数	定住戸数	調査戸数		調査人数					
						アンケート	ヒアリング	アンケート			ヒアリング		
								計	男	女	計	男	女
千ヶ滝	長野県北佐久郡 軽井沢町	690	5200	3300 西区：1600	300 西区：109	51 (うち定住43)	51 (うち定住43)	99	49	50	99	49	50
かしま野	茨城県 鹿嶋市 鉾田市		6000	3600	1000	186	39	337	162	175	69	31	38
美奈宜の杜	福岡県朝倉市	126	830	372	203	97	53	183	91	92	100	49	51

※その1の「表1調査対象」再掲

1-3 既往研究

「居住ネットワーク」および「地域コミュニティ」に関する既往研究を見る。「居住ネットワーク」については、近江・赤木による「ネットワーク居住」に関する論文^{注2)}があり、分散居住する家族のネットワークを論じている。「地域コミュニティ」については、田口・曾根によるコミュニティ形成に関する論文^{注3)}があり、約45年を経過したミニ開発住宅地における個々のグループ活動を詳細に論じ、キーパーソンの成立要素を分析している。

本報は、別荘地に移住した高齢者の居住ネットワークに着目し、親子関係が移住前と変化したのか、また新たにどのような近隣関係が築かれているのかを解明している。後者については、個人の交流パターンの質的内容を分析することにより、居住の安心と安全を保障する地域コミュニティの形成を考察していることが特徴である。

1-4 調査概要

調査対象、調査方法は前報と同様である(表1)^{注4)}。調査人数は、千ヶ滝は前報と同じ51世帯99人、かしま野は居住年数不明の6世帯を除く180世帯331人、美奈宜の杜は前報と同じ97世帯183人で、計328世帯613人である。

調査内容は、子どもに関しては、子どもの数・別居している子ども(年齢・性別・職業・現住所・別居年月・別居理由)・移住前交流状況・移住後の交流状況・交流状況の満足度等である。趣味活動に関しては、趣味の有無・内容・始めた時期・期間・場所・頻度・誰と・趣味を始めた動機等である。ボランティア活動に関しては、ボランティアの有無・始めた時期・内容等である。近隣の交流状況に関しては、付き合いの有無、立ち話をする人、困った時に助け合える人、悩みごとを相談できる人、あるいはお互いの家を行き来する人等である。(ちなみに、千ヶ滝の場合は定住者・別荘利用者・地元民が対象、かしま野の場合はM社住民・他社住民・地元民が対象、美奈宜の杜の場合は同街区住民・他街区住民・地元民が対象。詳細は後述)。

調査時期は、千ヶ滝は2009年9月、かしま野は2007年8月、美奈宜の杜は2008年8月である。

2. 家族ネットワーク

2-1 親子間の交流関係

子どもがいる世帯のうち、子どもの居住地や連絡頻度など、親子の家族ネットワークの状況を把握できたのは、千ヶ滝34世帯、かしま野37世帯、美奈宜の杜70世帯の計141世帯である^{注5)}。1世帯の子ども数は、「2

人」が84世帯と最も多く、次いで「1人」30世帯、「3人」21世帯、「4人以上」6世帯で、子どもの総数は287人である。性別は息子144人(50.2%)、娘132人(46.0%)、不明11人(3.8%)で、既婚184人(64.1%)、未婚(含む離婚)89人(31.0%)、不明14人(4.9%)である。

子ども総数287人を母数としてみると、親の移住前の同別居の状況は、別居207人(72.1%)、同居56人(19.5%)、不明24人(8.4%)と、もともと別居の割合が高い。別居の理由は「結婚を機に」が80人(29.3%)と最も多く、次いで「仕事の都合(就職、転勤など)」が53人(19.4%)、「進学」35人(12.8%)と続く。一方、現在同居しているのはわずか14人(4.9%)である。親の移住を機に別居した子どもは32人(11.7%)であった。

子どもの居住地は、千ヶ滝では関東地方が49人(69.0%)と最も多く、次いで海外が15人(21.1%)である。かしま野は関東地方が57人(75.0%)でその他の地域は少数、美奈宜の杜は関東地方が54人(38.6%)、九州地方39人(27.9%)、近畿地方23人(16.4%)である。いずれの対象地も、いわゆる「近居」居住はごくわずかで、車や新幹線で1～3時間の距離というケースが多い。

移住後の対面頻度は、全体では年1～2回(45.7%)と年5～6回(24.9%)で全体の約7割を占める(図1)^{注6)}。月1回以上という対面頻度の高い人は2割程度である。なお、移住前の対面頻度は、年1～2回(42.0%)に次いで月1～2回(27.5%)となっており、移住後に対面頻度が減った人が多い。居住距離と交流頻度はほぼ相関しており(表2)、移住後のほうが親子の居住距離が離れた場合が多いので、交流頻度も低くなる。

一方、連絡頻度をみると、移住後は月1～2回(46.1%)が最も多く、次いで週1～2日(24.4%)である(図2)。移住前後で比較すると、移住後の方が、連絡頻度が密になる割合が若干高い。連絡頻度は性別で差異がみられ、娘の場合、週1回以上連絡を取る人が7割、息子では3割弱という結果となった。現在の交流状況に対する満足度に関しては、非常に満足(32.0%)、やや満足(37.0%)を合わせると約7割になり、対面頻度は決して高いとは言えないが、現状に満足していることがうかがえる。連絡手段としては、電話のほかに、メールでのやりとりも多く聞かれた。

表2 子どもの居住地域別対面頻度

	計	ほぼ毎日	週1～2回	月1～2回	年5～6回	年1～2回	ほとんどない	不明
千ヶ滝	計	66	1	2	10	29	14	5
			1.5%	3.0%	15.2%	43.9%	21.2%	7.6%
	関東	49	1	2	10	26	7	1
			2.0%	4.1%	20.4%	53.1%	14.3%	2.0%
	海外	15	0	0	0	3	6	3
かしま野						20.0%	40.0%	20.0%
	近畿	2	0	0	0	0	1	0
							50.0%	50.0%
	計	73	0	0	9	20	17	1
					12.3%	27.4%	23.3%	1.4%
美奈宜の杜	関東	57	0	0	8	17	14	0
					14.0%	29.8%	24.6%	0
	海外	2	0	0	0	0	1	1
							50.0%	50.0%
	その他	5	0	0	0	0	3	2
九州						60.0%	0	40.0%
	不明	9	0	0	1	3	0	5
					11.1%	33.3%	0	55.6%
	計	134	1	1	22	14	65	9
			0.7%	0.7%	16.4%	10.4%	48.5%	6.7%
美奈宜の杜	九州	39	1	1	20	6	6	0
			2.6%	2.6%	51.3%	15.4%	15.4%	0
	関東	54	0	0	1	5	35	5
					1.9%	9.3%	64.8%	9.3%
	近畿	23	0	0	1	3	14	1
海外							60.9%	4.3%
	海外	7	0	0	0	0	4	3
							57.1%	42.9%
	その他	7	0	0	0	0	6	1
							85.7%	14.3%
不明	4	0	0	0	0	0	0	4
							0	100.0%

図1 移住前後の親子の対面頻度

図2 移住前後の親子の連絡頻度

子どもとの理想の居住関係について聞いたところ、夫婦とも別居希望が95%を占めた。理由としては、7割弱が「お互いが干渉しなくてすむ」と回答しており、3割が「自分の時間が持てる」としている。その他の回答として、「子どもの生活を重視する」「子どもに迷惑をかけたくない」など、子どものことを考えて別居を希望する人もみられた。また、理想の居住距離としては、「こだわらない」という回答が約4割でもっとも多い。逆に「隣居」や「徒歩圏内」など、近くに住むことを望む人は1割にも満たず、自分たちと子どもたちの生活を切り離して考えている世帯が多い。

以上をまとめると、子どもとの居住地は離れている場合が多く、対面頻度は少ないが、現状には満足している世帯が多い。親子の家族ネットワークは実際の距離よりも精神的な面でのつながりを重視しており、子どもや孫の存在自体が安心感をもたらしている。また、現代の情報機器を活用することにより、離れていてもつながりを持つ世帯も目立つ。老後も子どもを頼る気持ちは少なく、自分たちで自立した生活を送ろうとする新しい高齢者像を垣間見ることができる。

3. 地域ネットワーク ----- 交流活動

3-1 趣味活動の展開

趣味活動は、移住した高齢者にとって、自己実現の場として日常生活に占めるウェイトは大きい。移住で当地を選んだ理由として、各対象地において4~5割が「趣味に没頭できるため」と回答していることから推察される(その1「図9 居住評価」参照)^{注4)}。これを、地域ネットワークの観点からみると、趣味を通して仲間ができ、それが地域コミュニティの形成へとつながる。そこで、趣味活動について回答があった528人(千ヶ滝90人、かしま野269人、美奈宜169人)を対象とし、趣味活動の実態について、詳細に分析する。

趣味の内容については「スポーツ系」「創作系」「教養系」「娯楽系」に分類する。活動場所は、活動範囲を把握するため、「自宅」「地域内(それぞれの居住地内。例えば千ヶ滝なら千ヶ滝別荘地内)」「地域外」とし、趣味を通して人との関わり合いという観点から、個人で行う場合(「単独」)、夫婦で行う場合(「夫婦」)、仲間で行う場合(「地域内仲間」および「地域外仲間」)、また、それらとは別に「習い事」も加え、人的関係を分類する(表3)。多くの人は趣味を複数持っているが、ひとつの趣味ごとに上記を分類する。また、より詳細な状況を把握するために、ヒアリングを行った世帯に関しては個別に趣味活動データを作成し、事例を交えて傾向を示す。

全体の傾向としては以下の通りである。9割以上の人が何らかの趣味を持っている。内容は男性ではスポーツ系(44.8%)、女性では創作系(44.5%)がそれ

ぞれもっとも多い。具体的にはスポーツ系ではゴルフ、テニス、スキー、グランドゴルフ、卓球、ウォーキングなどが、創作系ではガーデニング、畑・菜園、工芸、手芸、絵画、陶芸などが、教養系では読書、楽器演奏、音楽鑑賞などが、娯楽系では囲碁、麻雀、旅行

図3 趣味を行う場所

表3 趣味の分類

内容	スポーツ系／創作系／教養系／娯楽系
場所	地域外／地域内／自宅
人的関係	地域外仲間／地域内仲間／夫婦／単独／習い事

などが多くみられる。以前から行っていたもののほかに、移住してから新たに始めた趣味も多い。約半数が、移住してから新しく始めた趣味を持つ。以前から興味があつて時間ができたので始めたというものもあるが、地域内にある趣味活動団体(〇〇クラブ、〇〇サークルなど。以後「サークル活動」と記す)に興味を持ち、始めるようになったというケースも多い。

活動場所は地域外(61.0%)がもっとも多く、次いで自宅(46.4%)、地域内(44.5%)と続く。人的関係では単独(57.2%)がもっとも多く、次いで地域内仲間(44.3%)、夫婦(37.7%)、地域外仲間(28.0%)、習い事(15.7%)である。また、ヒアリングデータをもとに、個人を軸にして、趣味活動の人的関係を「単独のみ」「仲間のみ」「(単独と仲間)両方」に分類してみると、夫・妻とも「両方」が全体の4割強(夫44.2%、妻44.9%)を占めもっとも多い。「単独のみ」は約3割(夫27.1%、妻31.2%)で、裏を返すと、7割の人が何らかの趣味を仲間と行っていることがわかる。

また、居住年数10年以上になると、夫婦一緒に趣味が減る。シルバーステージ^{注7)}でみると、stage0(60歳未満)とstage5(80歳以上)で趣味なしの割合が若干高い。またstage0とstage5は、人と関わる趣味を持つ人が少なく、場所も自宅が増える。stage0は有職の人もあり、stage5は体力・体調的な問題があるためと考えられる。つまり、stage1(60~64歳)からstage4(75~79歳)までが趣味活動が盛んといえる。

以下では、調査対象地ごとの特徴を示す(事例は図5)。

1) 千ヶ滝 95%が何らかの趣味を持っている。ひとりあたりの趣味の数は平均2.4個で、3地域のなかでもっとも多い。内容としては、男性はスポーツ系(45.1%)、女性は創作系(46.5%)がそれぞれもっとも多く、女性の教養系(25.7%)も比較的多い。場所は地域外(76.7%)と自宅(60.0%)が多く、地域内(36.7%)が少ない(図3)。地域内の活動拠点は、行政が所有し区会が運営する公民館のみで、他の対象地に比べサークル数は少ない。そのため、地域外での活動が増える。人的関係は他の地域と比べると、単独(76.7%)、地域外仲間(57.8%)、夫婦(47.8%)は多く、地域内仲間(33.3%)は少ない(図4)。

居住年数が浅いと仲間と趣味をやっている人は少ないが、年数が増すとまず地域外仲間が増え、その後地域内仲間も増える。年齢的

図4 趣味を行う人的関係

にみると、stage2（65 ～ 69 歳）が、地域内外の仲間との趣味活動がもっとも活発である。

2) かしま野 趣味を持っている人は 89%と多いが、趣味なしの割合も 3 地域のなかでは多く、とくに男性にみられる（12.2%）。内容をみると、男性はスポーツ系(37.1%)のほかに、創作系(31.3%)の趣味を持つ割合も高く、他地域と比較して男女による趣味内容の差が少ない。「釣り」「写真」「太極拳」「絵手紙」などはほかの地域ではあまりみられないが、これらはそれらのサークルがこの地域には存在し、サークル活動をしているためである。

タウン内には調査時点で 20 の趣味サークルが存在している。主に居住者の発案で発足したサークルが多いが、管理会社はそれに対して場所の提供およびサークルに依頼された案内の作成、情報誌への告知などを行っている。運営は基本的に居住者に任されているが、管理会社と居住者が連携をとりながら成り立っている。場所はタウンの共用施設である集会所などを提供しているが、タウン外の商業施設等を利用するサークルもある。

かしま野は、夫婦共通の趣味を持つ世帯が比較的小さい。また、サークル活動が盛んなためか、新しく始めた趣味を持つ人が多い。3 地域を比べ、居住年数による違いがもっとも少ない。これは、居住 1 年未満の居住者を対象としたお茶会の開催（詳細はその 1「交流サポートにおける居住者と管理会社の関わり」参照）^{注 4)}をとおして、入居の早い段階で情報交換や仲間づくりが進行することが理由である。また、stage3(70 ～ 74 歳)が地域内外の仲間との趣味活動がもっとも活発である。

3) 美奈宜の杜 趣味内容としては、男女ともにスポーツ系が多いのが特徴である（夫 54.2%、妻 41.5%）。活動場所は地域内が相対的に多い（図 3）。また、人的関係は地域外仲間は少なく（15.4%）、地域内仲間が圧倒的に多い（53.8%）（図 4）。これらは、地域内の施設が整っている結果といえる。

地域内のサークル活動は 21 あり、文化系サークルは主に地域内にあるコミュニティセンターで活動し、スポーツ系サークルは地域内のゴルフ場やテニスコート、卓球場をはじめ、市内にあるグラウンドや海洋センター等で活動している。管理会社は居住者のサークル活

動を、場所提供や活動スケジュールの告知等で協力している。管理会社が運営するコミュニティセンター内にある文化教室棟は、アトリエ・調理室・木工室等があり、多彩なサークル活動の拠点になっている。また利便棟の 2 階には、カラオケルーム、卓球室、囲碁将棋室などの娯楽施設もあり、居住者はサークル以外にもよく利用する。

居住年数 1 年以下では、自宅での単独の趣味が比較的多く、地域内の趣味活動は少ない。趣味活動を仲間と展開するには多少の時間がかかることがうかがえる。stage 2 と stage3 で地域内外の仲間との趣味活動がもっとも活発になり、stage4 以降では、仲間との趣味が減り、単独・自宅が増える。

3-2 ボランティア活動の展開

ボランティア活動の有無とその内容について地域別の特徴をみていく。対象はボランティア活動について回答のあった 578 人（千ヶ滝 76 人、かしま野 328 人、美奈宜の杜 174 人）である。

ボランティア活動をしている人は全体では 3 割弱で、男女比はほぼ同等である（夫 28.3%、妻 26.7%）。活動内容および割合については、地域によって差がみられる（事例は図 5）。

1) 千ヶ滝 ボランティア活動をしている人は 53.9%で、3 地域のなかで圧倒的に多い。とくに男性の活動割合が高い（57.9%）。内容は、スペシャルオリンピックスの軽井沢支援委員、国際親善クラブ、障がい者施設でのお手伝い、文化活動（音楽祭）のお手伝い、軽井沢の観光ガイドなど多岐にわたる。ひとりで複数のボランティアをしている人（対象人数 76 人のうち 22.4%）、夫婦で同じボランティア活動をしている世帯（夫婦世帯 37 世帯のうち 35.1%）が比較的多いのが特徴である。居住年数では 6 ～ 9 年、シルバーステージでは stage3 で活動している人がもっとも多い。

2) かしま野 活動している人は全体の 21.3%と、3 地域のなかではもっとも少ない。特徴として、居住年数による偏りが少ないことがあげられる。シルバーステージでは stage1、stage2 が多く、stage3 になると若干減少する。内容としては、海岸清掃、鹿島神宮のガイド、まちづくり委員、老人ホームでの手伝いなどがある。また、有償ボランティアであるが、かしま野では管理会社と連携して、居住者のための「買物および病

趣味事例1：千ヶ滝 NO.14

	内容	開始時期	場所			人的関係						
			外	中	自宅	外	内	夫婦	単	習	習	習
夫 (68)	スキー	新										
	ゴルフ	前										
	畑	新										
妻 (66)	コース	前										
	生け花	前										
	ガーデニング	新										

定住して6年。夫の趣味はスキー、ゴルフ、畑で、スキーは移住してから始めた。冬の間はほぼ毎日スキーに出かける。ゴルフは40年前からやっているが、こちらでサークルに入り、移住者との交流がうまれた。畑は5年前からやっている。畑がカトリック仲間と同じ場所にあるので、そこで情報交換などを行っている。妻の趣味はコース、生け花、ガーデニングである。コースと生け花は、地域外の仲間と週～2回行っている。ガーデニングは移住してから始めた。またゴルフをやり始め、夫婦で一緒に行くこともある。

凡例：開始時期：前…移住前から／新…移住後新たに

趣味事例2：かしま野 NO.33

	内容	開始時期	場所			人的関係						
			外	中	自宅	外	内	夫婦	単	習	習	習
夫 (67)	蕎麦打ち	前										
	麻雀	前										
	太極拳	前										
妻 (60)	朗読	新										
	薬膳料理	新										

移住して1年の夫婦。夫の趣味は蕎麦打ちと麻雀で、いずれも地域内のクラブに所属している。以前はゴルフもしていたが、膝が悪くなったためにやめた。蕎麦打ちは以前習っていた経験を活かし、自分でクラブを立ち上げ、月2回講師として教えている。妻は太極拳、朗読、薬膳料理が趣味である。太極拳は前住地から8年間続けており、現在は地域外の公民館で週1回通っている。以前はコースもしていたが、ボランティア活動を開始にあたりやめてしまった。ボランティアで絵本の読み聞かせをしている。

場所：外…地域外／内…地域内／自宅…自宅 人的関係：外…地域外仲間／内…地域内仲間／夫婦…夫婦／単…単独／習…習い事

趣味事例3：美奈宜の杜 NO.4

	内容	開始時期	場所			人的関係						
			外	中	自宅	外	内	夫婦	単	習	習	習
夫 (76)	囲碁	新										
	麻雀	新										
	読書	前										
妻 (71)	水墨画	新										

移住して9年。夫の趣味は囲碁、麻雀、読書。読書は移住以前からの趣味で、読んだ本をノートに記録しており、現在その数は1500冊である。麻雀と以後は移住後に始めた。囲碁は地域内のサークルに所属している。妻は水墨画が趣味で、地域内のサークルに5年間所属していたが、マンネリになってやめてしまった。現在は、色を付けるなど自分でアレンジした作品をつくらせている。また、以前はストレッチ、太極拳、卓球などのサークルにも所属していたが現在はやめている。趣味を通じてできた友人が多いという。

ボランティア事例1：千ヶ滝 NO.36

夫 (71)	スペシャルオリンピックス軽井沢支援委員
妻 (67)	国際親善クラブ
妻 (67)	スペシャルオリンピックス軽井沢支援委員
妻 (67)	国際親善クラブ

夫婦ともにスペシャルオリンピックス軽井沢支援委員、国際親善クラブのボランティアをしている。ボランティアを通じてできた友人が多く、そこからさらに輪が広がって、一緒にゴルフをしたり、趣味のクラブに誘われたりしている。夫は現在区会長をしているが、ボランティアでできた人脈を使って幅広く仕事をこなしている。

ボランティア事例2：かしま野 NO.20

夫 (63)	鹿島神宮のガイド
妻 (63)	視覚障がい者向けの朗読会
妻 (63)	かしま野の送迎サービス
妻 (63)	死去

以前に妻を亡くし、夫一人で移住して3年が経つ。現在、週2回鹿島神宮のガイド、月2回視覚障がい者向けの労働区会のボランティア、かしま野の送迎サービスの有償ボランティアを行っている。陶芸や太極拳、野菜づくりなどの趣味も持っているが、ボランティアの方がやりがいがあると感じ、有意義に過ごせると感じている。外での活動が多いため家にはあまりいない。

ボランティア事例3：美奈宜の杜 NO.43

夫 (74)	ボランティア活動なし
妻 (65)	朗読ボランティア
妻 (65)	病院のボランティア

妻は、地元の朗読ボランティアの会と、病院のボランティア活動をしている。自宅で、朗読をテーマに吹き込む作業をすることもある。趣味として茶道、ガーデニング、散歩などがあり、とくに茶道は20年近く続けていて茶道具もかなり豊富であるが、現在は茶道よりボランティアに行っている時間の方が長いという。ボランティアのためにはほとんど外出している。

図 5 趣味活動およびボランティア活動の事例

ては、もともとそれを目的に移住してくる人が多いこと、同年代が集まっていることなどから、サークルの組織が複数できていること、またそれを行う施設が整っていることが、さらに趣味活動の充実を後押ししている。また、趣味やボランティアを通して友人が多くでき、そのつながりからさらに新しい活動の輪が広がる様子が見られる。年齢が上がると体力の限界などにより趣味をやめるというケースもみられるが、仲間とやっていた趣味を持っていたことが、その後の付き合いの継続にもつながっている。

4. 地域ネットワーク ----- 交流傾向

本章では、移住に際し抱いていた交流意識を把握したうえで、地域ネットワークの構築プロセスを考察し、地域における交流傾向を分析する。

4-1 移住前の交流意識

移住前の地域交流に対する意識は、千ヶ滝で「積極的に交流したい」が5割、「必要な時のみ交流したい」が4割である。全体的に地域との交流を図ろうとする姿勢が感じられる。かしま野と美奈宜の杜ではどちらも「積極的に交流したい」は2.5割、「必要な時のみ交流したい」は6割である。これらの回答結果には、移住を考えたきっかけの一つに、忙しさや煩わしさから解放され、自分たちの時間を楽しみたいという強い思いが影響している。

4-2 地域ネットワークの構築プロセス

地域ネットワークの構築には、3段階の交流関係がみられる。第一段階は隣人交流である。地域の交流は、たまたま近隣で顔見知りになることから始まる。挨拶を交わしたり、立ち話をしたりすることをここでは「隣人交流」と称する。そのきっかけに、犬の散歩・ガーデニング・自治会やイベントの参加がある。犬の散歩では毎日定刻に散歩する場合、飼い主同士が顔見知りになる。犬を飼育するのは3地域とも3割前後である。ペットを通しての「付き合いがある」は、飼育世帯の8割から9割と高い。その内訳は「立ち話程度」が7割台で、それ以上の深い付き合いは少ない。

また、ガーデニングをしている割合は、千ヶ滝88.4%、かしま野75.8%、美奈宜の杜71.1%で、いずれも高い。「付き合いがある」は千ヶ滝で5割、かしま野で9割、美奈宜の杜で8.5割である。そのうち「立ち話程度」は、かしま野と美奈宜の杜で7割台、「家の往来がある」は、千ヶ滝で73.6%である。千ヶ滝は、ガーデニングを通しての付き合いは少ないが、密度は濃いと言える。

自治会あるいはイベント（年中行事・季節行事など）に参加することにより、顔見知りになることがある。かしま野には自治会はないが、管理会社やクラブ・サークル主催のイベントがある。イベント参加率は、千ヶ滝で7.5割、かしま野で7割、美奈宜の杜で5割である。

つぎに、第二段階は仲間交流である。前述の隣人交流から、様々な情報を得て、趣味活動やボランティア活動に参加する、あるいは自治会やイベント活動に参画するきっかけが生まれる。趣味活動やボランティア活動、あるいは自治会活動で定期的に共通目的の交流が行われることにより、仲間意識が芽生える。また、不定期ではあるがイベントに参画することによって連帯感が生まれ仲間となる。これを「仲間交流」とする。そして、仲間同士で困った時に協力し、助け合うことがある。また、共通の目的のために組織（サークル・クラブ等）を結成し、定期的に集まるために施設（コミュニティセン

図6 地域ネットワークの構築プロセスと地域コミュニティとの関係

ター・グラウンド等）を確保する。

さらに、第三段階は親友交流である。仲間同士のつながりが深化すると、個人同士の深化の場合、個人的な付き合いに展開し、いわゆるプライベートな悩みを相談するほどの親密な「親友交流」になる。一方組織として深化すると、地域に貢献する支え合いに発展することがある。

以上から、交流関係には、偶発的交流の隣人交流（顔見知り）と、自発的交流の仲間交流（助け合い）と親友交流（親密）の3つの段階があり、これが住民間のつながりを生み、地域ネットワークが構築される（図6）。一方、仲間交流から組織交流に発展すると、住民同士の支え合いを生み、地域コミュニティが形成される。いずれも「仲間交流」が核となる^{注8)}。

4-3 地域における交流傾向

本節では、地域における交流傾向を分析することにより、地域ネットワークの様態を量的に把握する。交流傾向は、交流関係（顔見知り、助け合い、親密の段階とする）における交流相手の有無からみる。交流相手は地域の住民構成に左右される。千ヶ滝では別荘利用者が大多数で定住者は少数で分散している（調査当時、西区では全世帯1600に対し、定住世帯は109）。かしま野では居住区が小規模で広範囲（調査当時700ヶ所）に点在し、1つの居住区はM社住民以外に他社購入者や地元民で構成されている。美奈宜の杜は、高低差（220m）のある立地で、開発が3期にわたり各街区は分断している。3地域の住民構成は、千ヶ滝では、定住者／別荘利用者／地元民、かしま野は、M社住民／他社住民／地元民、美奈宜の杜は、同街区住民／他街区住民／地元民となる（図7）。以下では、各地域において、交流関係が交流相手によってどのように異なるのかを分析する（図8）。

1) 千ヶ滝 交流関係をみると、顔見知り交流が多く、次に親密交流が続く、助け合い交流が少ない。定住者との交流が圧倒的に高く、別荘利用者と地元民との交流はほぼ同じ程度である。定住者は少数派ゆえに結束が強いといえる。また長い別荘地としての歴史の中で、別荘地を支える地域内の地元民の存在が大きいことが覗える。

2) かしま野 交流関係では、顔見知り交流が多く、助け合い交流が続く、親密交流が少ない。M社住民との交流関係が強く他社住民、地元民と続く。M社の管理会社が広域にわたるM社の住民を

図7 住民構成概念図

図8 地域における交流傾向（全体＝夫＋妻）

注1: 図の三段は、各地域の三者に対する交流密度の組合せを示す。
 注2: 濃い黒は親密、薄い黒は助け合い、斜線は顔見知り、白は孤立を示す。
 注3: 図内の中央の数値は該当人数を示す。
 注4: 実線で囲むのは「千ヶ滝」、破線で囲むのは「かしま野」、点線で囲むのは「美奈宜の杜」でそれぞれの主要な交流タイプを示す。

図9 5つの交流パターンと20の交流タイプ

結びつけるイベントを積極的に開催することで交流を高めている。しかし、同一居住区に他社住民や地元民が居住するため、居住年数が長くなると彼等とも顔見知りになり、それなりの交流が生まれる。

3) 美奈宜の杜 交流関係をみると、顔見知り交流が多く、次に助け合い交流で、親密交流が極端に少ない。交流相手をみると、近くの同街区住民よりも遠くの他街区住民との交流が強い。コミュニティセンターでの活発な趣味活動の参加が他街区住民同士を強烈に引きつけているのだろう（その1の表3、表4を参照）。同街区住民と地域周辺の地元民とは殆ど同じ交流程度である。

地域別にみると、全体的に交流が活発なのは、千ヶ滝、かしま野、美奈宜の杜の順になる。それぞれの地域で最も交流が盛んである定住者、M社住民、他街区住民は、いずれもお互いの居住距離が離れていることがわかる（図7参照）。

5. 地域ネットワーク ----- 交流パターン

本章では、個人の交流パターンを解析することにより、地域ネットワークの様態を質的に探る。交流パターンは、3地域ごとの交流相手3者（図8参照）に対する「交流密度」と「交流範囲」の組み合わせからみる（図9）。

5-1 交流パターンと交流タイプ

3者に対する交流密度は前章の親密、助け合い、顔見知りの他に孤立を加え4段階とする。同じ交流範囲で複数の密度の交流がある場合は、密度の高いものを優先する。図9の縦軸は交流密度を示し上方を濃、下方を薄、横軸は交流範囲を示し、交流ありの3者、2者、1者、無しに対応して、図の右方を拡、左方を狭とする。また、親密を含むグループを「積極派」、助け合いを含むグループを「中間派」、顔見知りを含むグループを「消極派」、残りを「孤立派」とする。

以上より、交流パターンは「濃・拡」型＝交流密度が濃く、交流範囲が広い（6タイプ）、「濃・狭」型＝交流密度が濃く、交流範囲が狭い（4タイプ）、「薄・拡」型＝交流密度が薄く、交流範囲が広い（4タイプ）、「薄・狭」型＝交流密度が薄く、交流範囲が狭い（5タイプ）、「孤立」型＝交流が全くない（1タイプ）、の5つのパターン、計20タイプに分類される。

3地域全体での交流パターンをみると（図9、図10）、「濃・拡」型が最も多く（33.8%）、「薄・狭」型が続き（26.1%）、「濃・狭」型が17.3%、「薄・拡」型が12.9%、「孤立」型が10.0%である。「濃」（「濃・拡」＋「濃・狭」）の交流が5割を超え、「拡」（「濃・拡」＋「薄・拡」）の交流は4.5

図 10 全体・夫婦別交流パターン

図 11 地域別交流パターン

割強である。ちなみに、積極派は 313 人 (51.1%)、中間派は 113 人 (18.4%)、消極派は 126 人 (20.6%)、孤立派は 61 人 (10.0%) となる。地域での交流が希薄、あるいは無いという消極派と孤立派は合わせて 3 割を占める。

夫と妻別にみると (図 10)、夫も妻も「濃・拡」型が共に 3 割台であるが、「濃・狭」型は妻 (20.4%) の方が多く、「薄・狭」型は夫 (30.0%) の方が多い。「孤立」型は夫が 11.0%、妻が 8.9% と差がある。夫は、「濃」と「拡」が共に 4.5 割である。妻は、「濃」が 5.5 割、「拡」が 5 割弱と、妻のほうが交流に積極的である。

5-2 地域における交流パターン

次に、地域別に交流パターンの特徴をみる (図 11)。事例を図 12 に示す。

1) 千ヶ滝 「濃・拡」型が 66.7% と圧倒的多数を占め、「孤立」型は 6.1% と少ない。「濃」が 8 割弱、「拡」が 6.5 割である。戦前からの伝統的な別荘地でパーティ文化が根付いており、おもてなしが日常的にあり、交流が盛んである。

NO. 27 宅 夫 67 歳、妻 66 歳 別荘定住族 別荘 3 年定住 5 年 夫婦とも「濃・拡」型。妻の実家が軽井沢に別荘を所有していたので、小さい頃から別荘生活に馴染んでいる。夫の海外赴任で、アメリカでの居住経験がある。そのような環境で人を招いたり、招かれたりするホームパーティが頻繁にあり、交流が活発である。特に、夫婦で参加しているボランティア活動を通してつきあいが広がるが、

現在は地元民との接点は少ない。

2) かしま野 「濃・拡」型が 30.8%、「薄・狭」型が 26.3% であり、「濃・狭」型が 20.2% と他の地域に比べ多い。「濃」が 5 割、「拡」が 4.5 割を占める。交流積極派が消極派をリードしている。居住区が分散しているが、管理会社の仲介で共用施設 (M 社専用) での地域交流が活発である。

NO.17 宅 夫 71 歳、妻 63 歳 居住年数 3 年 夫婦とも「濃・拡」型。居住年数は短いですが、管理会社の後押しもあり、交流には積極的である。夫はかしま野に来てから複数の趣味を持つようになり、地元民の手ほどきを受けて畑で野菜作りに夢中である。妻はかしま野内外の多数のクラブに所属し、老人ホームでのボランティアにも参加し活躍している。

NO.14 宅 夫 66 歳、妻 66 歳、夫の母 (要介護 3) 90 歳 居住年数 5 年 夫は「薄・拡」型、妻は「薄・狭」型。病気の母親のために空気のきれいなかしま野に移住する。夫は M 社の買い物及び病院の送迎サービス (有償ボランティアでバスの運転) に週 4 日従事し、それ以外の日は写真や木工の趣味を楽しんでいる。付き合いは、M 社の人が中心であるが、他社住民と地元民との交流はある。妻は母親の介護で忙しく、付き合いは少ない。

3) 美奈宜の杜 「濃・拡」型が 21.3% と少なく、「薄・狭」型が 32.2% と目立ち、「孤立」型が 12.6% と 1 割を超える。「濃」が 3.5 割、「拡」が 4 割を占め、交流消極派が先行しているが、特に夫にその傾向が強い。シニアタウンということで、「至れり尽くせり」の生活を想定する住民の依存意識の表われと考えられる。

NO.25 宅 夫 75 歳、妻 69 歳 居住年数 10 年 夫は「孤立」型、妻は「濃・狭」型。夫は要介護の認定を受けており、杖を使つての歩行である。現在は畑で野菜を作るのが唯一の楽しみであるが、地域での付き合いはない。妻は、サークルに所属していて、同街区にも他街区にも親しい人が居る。

NO.23 宅 夫 83 歳、妻 74 歳 居住年数 7 年 夫は「薄・拡」型、妻は「濃・拡」型。退職後はハワイで海外生活を経験したが、病気になったことを考えて不安になり帰国し、シニアタウンとして売り出した美奈宜の杜 (アメリカのサンシティをイメージ) を選択した。夫婦とも付き合いは盛んであるが、特に妻はサークルを主宰し、顔が広い。しかし、妻は「同街区よりも他街区の人との付かず離れずの付き合いのほうが長続きする」と話す。

ここで、3つの地域での交流パターンの違いとその要因を考察する。地域別にみると、交流が盛んなのは、千ヶ滝、かしま野、美奈

<p>千ヶ滝 No.27 宅</p> <p>定住者 別荘利用者 地元民</p> <p>夫(67) 妻(66)</p>	<p>かしま野 No.17 宅</p> <p>M社住民 他社住民 地元民</p> <p>夫(71) 妻(63)</p>	<p>かしま野 No.14 宅</p> <p>M社住民 他社住民 地元民</p> <p>夫(66) 妻(66)</p>	<p>美奈宜の杜 No.25 宅</p> <p>同街区住民 他街区住民 地元民</p> <p>夫(75) 妻(69)</p>
<p>美奈宜の杜 No.23 宅</p> <p>同街区住民 他街区住民 地元民</p> <p>夫(83) 妻(74)</p>	<p>千ヶ滝 No.5 宅</p> <p>定住者 別荘利用者 地元民</p> <p>夫(70) 妻(66)</p>	<p>かしま野 No.11 宅</p> <p>M社住民 他社住民 地元民</p> <p>夫(71) 妻(64)</p>	<p>美奈宜の杜 No.62 宅</p> <p>同街区住民 他街区住民 地元民</p> <p>夫(72) 妻(71)</p>

(□=夫 ○=妻 ■親密 ■助け合い □顔見知り □孤立)

図 12 代表的な交流パターンの事例

宜の杜の順になる。交流密度が濃く、交流範囲が広い「濃・拡」型は、千ヶ滝(66.7%)が高く、逆に全く交流がない「孤立」型は、美奈宜の杜(12.6%)が高い。

千ヶ滝は、由緒ある日本を代表する高級別荘地である。住民は社会的階層が高く自立意識も高い。信仰を通した奉仕精神が旺盛(住民の25%がクリスチャン)で、誰でも受容する洗練された交際術を身に付けており、交流が活発である。かしま野は、開発40年を経過した大衆別荘地で、小規模な居住区が広域に分散している。M社専用のコミュニティプラザで居住区が離れているM社住民同士の交流を図っている。交流は積極派と消極派に分かれているが、自立意識の高い住民が、管理会社との協働で交流の推進に努め、結果的に積極派がリードしている。美奈宜の杜は、シニアタウンとして開発されており、共用施設が充実している。ハード面の施設は完璧であるが、ソフト面の運営が計画どおり進んでおらず期待外れになっている(生活利便施設が世帯数不足のため、開業されていない)。住民の中には完備した施設を活かし趣味活動に専念し交流を深める積極派と、諦める消極派・孤立派に分かれ、後者の割合が高い。

交流関係を豊かにする要件とは、前報その1の居住システムで示した、住民の自立意識、管理会社のサポート体制並びに完備された共用施設の3つである。

5-3 交流パターンからみる人間関係の様相

交流パターンの中身を精査すると、①1人でも親密な付き合いの人が居る＝「濃」や、②多様な付き合いがある＝「拡」がそれぞれ半数を占める。ヒアリングによると、「濃」の付き合いは、プライベートな悩みを相談したり、お互いの家を往来するが、過度に干渉しない節度のある付き合いで、家族以外に身近に親しい人がいることは安心であるという。(千ヶ滝 NO. 36 宅 地域の人との対応は、基本的にはテラスや庭のベンチで行う)。千ヶ滝の敷地は一区画300坪が基準で、どの家も広い庭が存在する^{注9)}。広くて手入れの行き届いた庭でガーデンパーティが開かれることが多い。それ以外の地域でも、庭が気軽な対応の場になっている。交流の場を庭やテラスに留めてみだりに家の中に入れない、つまりプライバシーを極度に侵さない緩やかな付き合いがみられる。(美奈宜の杜 NO. 58 宅 姉妹同然の家族的な付き合いをしていた隣人同士が、ある時プライベートな内容が噂話になって広がり、仲違いして一方が転居した事例もあり、親しい付き合いのなかにも一線を画すことが教訓になっているという)。親しく付き合いのある人でもお互いの家は離れて立地しているので、それなりに両者の距離感を保っているといえる。

「拡」の付き合いは、立場の異なる人との付き合いで、特に地元の詳しい情報を教えてくれる地元民との付き合いは、生活の幅を広げてくれるという。(千ヶ滝 NO. 7 宅 別荘地内で戦前から酒店を営業している店主は、軽井沢の生き字引のような人でいろいろ相談することが多い)。米づくり、畑づくり、海釣りなど都会生活では味わえない楽しみを謳歌している。(かしま野 NO. 19 宅 野菜作りを始め、苗、土、手入れなど地元の人に丁寧に教えてもらって収穫の喜びを経験した)。生活スタイルの異なる人との付き合いは、異なる価値観を認めることであり、人間の幅を広める人格形成にもつながる。

人生経験豊富な高齢者が自分とは異なる多様な価値観を認めて、上下関係がなく対等で、なおかつ過度にプライバシーに関わらない

緩やかで幅広い人間関係を築く「濃」と「拡」の交流を、ここでは「フラットコミュニケーション」と称する。高齢期の生活の質は、人間関係に左右されると言われるが、この「フラットコミュニケーション」は、高齢者の生活を豊かにする。

6. 地域コミュニティ-----キーパーソン

シニアタウンにおける地域コミュニティの形成には、住民同士のつながりである地域ネットワーク＝人間関係と、前報で解明したサポート体制の居住システム＝体系が相乗効果を発揮する。すなわち、帰属意識と連帯性を有するコミュニティを継続させるには、住民のつながりと支え合いをコントロールするキーパーソンの存在が欠かせない^{注10)}。本章では、地域コミュニティのキーパーソンとしての条件を交流パターンから事例を通して考察する。交流パターンについては3つの視点から、①「居住タイプ」については千ヶ滝、②「居住年数」についてはかしま野、③「シルバーステージ」については美奈宜の杜から、対象地の特性に即して差異性を解明する。

6-1 地域の特性別交流パターン

1) 千ヶ滝居住タイプ別交流パターン

千ヶ滝は、日本有数の別荘地で、別荘利用の割合が高く、移住当時から定住する定住族と、別荘利用後定住する別荘定住族と、長期滞在であるが冬季には本宅へ戻る別荘族(しかし、夫は現役で週末のみ別荘利用)に分類できる。本項では、居住タイプの違いによる交流パターンの変化を検証する(図13)。

定住族は、交流密度と交流範囲を示す「濃」が8割、「拡」が6.5割を占める。別荘定住族は、「濃・拡」型が93.8%を占め、最も交流密度が高い。一方、別荘族は、「濃」と「拡」が共に2.5割で、「孤立」型が21.4%と高い。居住タイプにより交流パターンが異なることがわかる。別荘定住族は、別荘生活も定住生活も経験があることから、定住族とも別荘族とも地元民とも交流が深い。

NO.5 宅 夫70歳 妻66歳 別荘定住族(別荘利用30年、定住3年) 夫婦とも「濃・拡」型。別荘利用時から近所付き合いは積極的にしていたが、定住後はさらに増えた。夫は複数の趣味を持ち、特にゴルフ好きで4つのサークルに入り、ゴルフ友達は数知れない。妻は多彩な趣味を持ちながら、ボランティア活動にも活躍している。夫は頼まれると断れない性格だというが、居住経験も豊富で周りからの信頼も篤い。次期区会長候補である。

2) かしま野居住年数別交流パターン

かしま野では開発から40年が経過し、居住年数に拡がりがある。本項では、居住年数の違いによる交流パターンの変化を検証する(図14)。居住年数区分は、1年から2年まで、以降は4年ごとに見る。

1～2年では、「濃」は3.5割、「拡」は2.5割と低く、「薄・狭」型が36.4%と少し高い。3～6年では、「濃」と「拡」が共に5割と増え、7～10年では、「濃」と「拡」が共に6割前後と拡大し、「孤立」型が8.2%と減少する。さらに11～14年では、「濃」(61.6%)が少し拡大し、「拡」(55.6%)が少し減少する。15年以上では、「濃」と「拡」は共に4割強で、付き合いの幅が狭まり、「孤立」型が14.3%と増加する。居住年数により交流パターンが変容することがわかる。居住年数が浅い期間は、交流はそれほど進展せず、3～6年経過すると交流が進み、さらに7～10年経つと「孤立」型が減り、11～14年では交流が密になり、15年以上になると交流が密と孤

図 13 千ヶ滝 居住タイプ別交流パターン

図 14 かしま野 居住年数別交流パターン

図 15 美奈宜の杜 シルバーステージ別交流パターン

の両パターンに分かれるが、女性単身者のなかには、それまでの交流を継続しているケースがみられる。居住年数 7 ～ 14 年の住民は、居住を重ねることにより、地域の住民や環境の事情を掌握し、適切な対応が可能になり、交流が深まる。

NO. 11 宅 夫 71 歳 妻 64 歳 居住年数 7 年 夫婦とも「濃・拡」型。夫は移住後田んぼで稲作、畑で野菜、他に塩・焼酎・ビール造りを始め、地元の人に生産の手ほどきを受けている。妻は移住後バラづくりに凝り、周りに勧められて 2 年前からバラの咲く季節にオープンガーデンを始めた。それがきっかけで付き合いが広がっている。また大型犬のゴールデンレトリバーを 2 匹飼っており、夫婦で散歩に出掛け、犬友達も多い。夫婦が独自の生活を楽しんでいる様子は、定住後の生活の手本となり、皆の憧れの的である。

3) 美奈宜の杜シルバーステージ別交流パターン

美奈宜の杜は、日本初のシニアタウンで開発が 3 期にわたるため、対象とする退職後の高齢者の年齢に幅がある。本項では、シルバーステージ（年齢）ごと、すなわち 5 段階のステージによる交流パターンの変化を検証する（図 15）。

stage0 では、「濃」が 2.5 割強、「拡」が 1.5 割であり、「濃・拡」型は 11.1% と少ない。stage1 になると、「濃」も「拡」も増え、stage2 では、「濃」が 3 割、「拡」が 4 割となる。stage 3 では、「濃」が 5 割強、「拡」が 5.5 割強を占め、「孤立」型は 5.6% と減少する。stage4 では、「濃」が減少、「拡」は変わらずで、「孤立」型（18.2%）が大幅に増加する。stage5 になると、「濃」が 16.7% と減り、「拡」

が 3 割となり、「薄・狭」型も 33.3% となる。年齢に応じて、交流パターンが変化している。stage0 から次第に交流が深まり、stage3 で交流が最も盛んになり、それ以降は年齢が高くなるにつれて交流が少なくなる。stage3（70 ～ 74 歳）の住民は、活動的な 60 代に経験したことを生かし、交流を深めている。またサポートに関しては、stage3 は身体機能の低下により「サポートする側」と「される側」の分岐点になるといえる。

NO. 62 宅 夫 72 歳、妻 71 歳で stage3 居住年数 12 年 夫婦とも「濃・拡」型。夫は退職後、市の非常勤特別職に勤務したことがあり、また地域内の複数のサークルに所属していることから、地域内外で顔が広い。長年の居住経験のもとに美奈宜の杜の現状を正確に把握しているゆえ、区会長として美奈宜の杜の将来計画を市との連携のもとにしっかりと立てている。妻は夫とともに区会に深く関与することになり、以前よりも地元民を始め付き合いが増えた。

6-2 交流パターンからみるキーパーソンの条件

以上から、地域ごとの事例で明らかのように、地域コミュニティのキーパーソンの条件は、①居住経験が豊かで、地域の様相を熟知している ②地域の複数の活動に参加してさまざまな人と多面的な付き合いがある ③それゆえ自分とは異なる価値観も認め、公平な判断ができること が基本で、その他④奉仕精神が旺盛であること ⑤独自の目標に向かって高齢期の生活を楽しんでいること ⑥住宅地の将来構想を立案する力量があること、等である^{注11)}。これらの条件を満たす別荘定住族か、居住年数 7 ～ 14 年か、シルバーステージ 3 に該当する住民が適任であると思われる^{注12)}。

地域での交流が希薄、あるいは無いという「薄狭型」と「孤立型」の交流パターンは、合わせて 36.1% を占める（図 9、図 10 参照）。その中身をみると、居住年数が浅いため近隣との交流が広がっていない（かしま野 NO. 18 宅）とか、要介護者で歩行困難のため外出を控えている（美奈宜の杜 NO. 25 宅）、あるいは 80 歳を超える高齢で複数の病気を抱え通院中心の生活である（美奈宜の杜 NO. 8 宅）などの理由により、地域でのつきあいが少なくなっている。このような人たちの見守りもキーパーソンの重要な役割の一つである。

シニアタウンでは、地域の住民のつながりだけでなく、支え合いとの連携を可能にするキーパーソンが存在して始めて、持続可能な地域コミュニティが醸成される（図 16）。

図 16 地域コミュニティの形成

7. まとめ

以上から、シニアタウン化した住宅地における居住ネットワークと、それと連携する居住システムから地域コミュニティに関して次のことが明らかになった。

- 1) 移住後の親子関係は、居住距離が遠くなり対面頻度は少なくなったが、情報機器を活用しての連絡頻度は増え、交流関係は良好である。老後は子どもに依存することなく夫婦で自立した生活を送ろうとする新しい高齢者像が浮かび上がる。
- 2) 移住目的の一つである趣味活動やボランティア活動は活発で、住民の生き甲斐になっている。趣味に関しては移住後新しく始めた趣味を含めて多彩な趣味を持ち、一人でする、夫婦でする、同年代の仲間とするなど、さまざまな形態を持ち、享受している。
- 3) 地域ネットワークの形成プロセスは、身近な隣人交流による情報交換が起点となる。共通目的である定期的な交流から仲間交流へと発展し、個人同士の関係が深化し親密な個人交流につながる。更に仲間交流が新たな基点となり組織交流が生まれ、地域住民の支え合いが促進され、地域コミュニティの基礎が創られる。地域ネットワークや地域コミュニティの構築には、仲間交流が中核的役割を果たす。
- 4) 仲間交流を支えるための条件は、自立する個人と仲間意識を育てる組織（趣味活動・ボランティア活動・自治会活動・イベント活動）と活動する場である地域の共用施設（公民館・コミュニティセンター・グラウンド等）が三位一体で運用されることである。これらは、その1で述べた居住システムとの関わりが強い。
- 5) 地域ネットワークの形の中で、交流パターンの「濃」＝親密な付き合い＝は生活に安心をもたらし、「拡」＝幅広い付き合い＝は生活の広がりを生む。「濃」と「拡」が適度にミックスされた、緩やかで多様な繋がりを有する「フラットコミュニケーション」は、高齢期の生活を豊かにする人間関係をつくる。
- 6) シニアタウンにおいては、住民同士の「つながり」に加え、「支え合い」を基盤にした地域コミュニティの形成が必要となる。キーパーソンは、つながり（個人）と支え合い（組織）をコントロールして地域コミュニティを発展・継続させる重要な役割を果たす、必要不可欠な存在である。キーパーソンの最適条件としては、居住年数10年前後で、ある程度の居住経験を活かせること、さらに複数の活動に関わることでさまざまな経験を積み、自分とは異なる価値観にも公平な判断ができること、をあげることができる。

謝辞

本研究は、科研費基盤研究C（NO.20560586）および住宅総合研究財団（NO.0815）より助成を受けた。ここに記して謝意を表します。

注

- 注1) 筆者らは、6箇所で開催したが、今回対象としていない調査地は、千葉県夷隅郡御宿町、茨城県稲敷市、栃木県那須郡那須町である。参考文献4)
- 注2) 参考文献4)
- 注3) 参考文献5)
- 注4) 参考文献1) 参照
- 注5) 親子関係については、かしま野においてはアンケート調査のみ実施の世帯（147

世帯）には調査していない。また、未回答により親子関係が把握できない世帯が千ヶ滝で12世帯、美奈宜の杜で7世帯あったためそれを除外すると、計167世帯となる。もともと子どもがいない世帯は、千ヶ滝4世帯、かしま野2世帯、美奈宜の杜20世帯の計26世帯で、それを差し引いた141世帯を対象としている。

- 注6) かしま野の移住前の対面頻度は質問していないので、データは千ヶ滝と美奈宜の杜のみである。また、その時点で同居している場合と未回答の人は除外している。図2も同様。
- 注7) 筆者らは、高齢者の年齢を「シルバーステージ」として、60歳未満をstage0、60～64歳をstage1、65～69歳をstage2、70～74歳をstage3、75～79歳をstage4、80歳以上をstage5に分類している。参考文献1)～3) ほか。
- 注8) 本稿は、助け合いは仲間同士の限定的な支援とし、支え合いは組織として地域住民への継続的な支援と捉える。つながりと支え合いが地域活性化の原動力となる。
- 注9) 千ヶ滝（定住43世帯対象）では、庭面積は214.0～3172.2㎡で平均845.0㎡である。参考文献9)
- 注10) キーパーソンとは、任意の組織、コミュニティ、人間関係の中で、とくに大きな影響を全体に及ぼす「鍵となる人物」を指す。
- 注11) ヒアリング調査では、各世帯に対して5名のチームで自宅を訪問し、プラン採取や写真撮影に加え、事前に配布した調査票の回答をもとに1時間以上かけてヒアリングを実施し、その結果を世帯別にデーターシートに記録する。そこから対象者の生活状況や生活姿勢を詳細に把握し、筆者が総合的に判断してキーパーソンの条件をまとめている。
- 注12) 居住年数とシルバーステージはほぼ相関するので、居住年数10年前後はシルバーステージでは3（70～74歳）になることが多い。

参考文献

- 1) 竹田喜美子・番場美恵子：開発プロセスと立地環境および管理体制からみるシニアタウン化した住宅地における居住システムの構築 別荘地と定住地の二面性を有するシニアタウン化した住宅地における高齢者の居住環境に関する研究その1, 日本建築学会計画系論文集 第79巻第695号, pp.29-37.2014.1
- 2) 竹田喜美子・番場美恵子：シニアタウンにおける高齢者の居住環境の再編に関する研究—福岡県甘木市のMタウンと長野県軽井沢町のS別荘地の事例—, 住宅総合研究財団研究論文集第37号2010年度版, pp.321-332.2011.3
- 3) 竹田喜美子・番場美恵子・小森佑子：別荘地から定住地に転換したシニアタウンにおける高齢者の居住環境に関する研究 その1～13, 日本建築学会大会学術講演梗概集E-2, 2006～2011（その1.2: pp.29-32, 2006/その3.4: pp.203-206, 2007/その5.6: pp.161-164, 2008/その7～9: pp.217-222, 2009/その10.11: pp.181-184, 2010/その12.13: pp.347-350, 2011）
- 4) 赤木美苗・石坂公一・武内麻子：ネットワーク居住における世帯属性別の交流特性, 日本建築学会計画系論文集 第73巻第624号, pp.401-406.2008.2
- 5) 田口慎子・曾根陽子：コミュニティ形成に果たすグループ活動とキーパーソンの役割 1960年代のミニ開発住宅地における近隣交流に関する研究その3, 日本建築学会計画系論文集 第75巻第648号, pp.343-351.2010.2
- 6) 井上由紀子・大原一興・小滝一正：まちづくり活動への参加と地域生活に関する考察 高齢期における地域生活に関する研究その1, 日本建築学会計画系論文集 第547号, pp.103-110, 2001.9
- 7) 広井良典：コミュニティを問い直す, 筑摩書房, 2009.8
- 8) 竹井隆人：集合住宅と日本人, 平凡社, 2007.10
- 9) 竹田喜美子・大澤直子：別荘地の「庭およびガーデニング」が居住環境に与える効果に関する研究—軽井沢町S別荘地の場合—, 昭和女子大学紀要 837号, 2010.7)

CONSTITUTION OF RESIDENTIAL NETWORKS AND FORMATION OF REGIONAL COMMUNITIES AT SENIOR CITIZENS' TOWNS

A study on the residential environment of elderly settlers of a residential area that changed into a town for
senior citizens and that has bilateral character of a villa and settlement Part 2

Kimiko TAKEDA^{*} and *Mieko BAMBA*^{**}

^{*} Prof. Emeritus, Showa Women's University, Ph.D.

^{**} Lect., Dept. of Environmental Science and Design, Showa Women's University, Ph.D.

In accordance with their increasingly long life expectancies, elderly individuals are more frequently opting to live their “second lives” in areas rich in nature. Consequently, these areas, as well as former villages, have been transformed into senior citizen towns. In this study, the authors researched three such areas, each having its own distinct characteristics. The first was a high-class villa area, Sengataki in Karuizawa, Nagano Prefecture, that was founded about 90 years ago. The second was a more moderately priced public housing development in Kashimano, on the coast of Ibaraki Prefecture, that was established about 40 years ago. The third was Minagino-mori in Fukuoka Prefecture, which was specifically developed as a senior citizens town about 10 years ago.

In part 1 of this study, the overall organization of the residents, the management company, and the common facilities available were identified as essential factors affecting sustainable living in such areas.

The aim of part 2 was to gain knowledge of environments that promote stable and independent living by analyzing residential arrangements from the perspective of social relations.

We were able to clarify the following six characteristics of such environments: 1) the ties between parents and their children after moving were still strong due to increased communication, despite less frequent face-to-face contact; 2) residents could actively pursue their hobbies, independently, as a couple, or in groups arranged by age, and take part in various volunteer activities, giving their life more perceived worth, which was a primary incentive in their decision to move to a seniors town; and 3) the process of constructing a regional network starts with social relations at the neighborhood level, progresses to the group setting through engaging in hobbies and participating in volunteer activities, and ends with the development of more intimate personal exchanges. Organizational exchange is generated through means such as residents' association activities, which in turn accelerates the fostering of mutual support among residents; this is the process that shaped the basic regional community; 4) mutual support derived from a combination of self-support, organizational exchange, and use of common facilities is necessary; 5) among residents, a wide range of communication patterns, from general to intimate, expands their horizons and provides them with peace of mind.

When general and intimate communication patterns are moderately combined and loosely linked, it results in better social relations; this is defined by the authors as “Flat Communication”; and 6) the construction of the regional community in a senior citizens town must be based on mutual support and communication among residents. It is also of critical importance to have a leader who plays a key role in its development and sustainability. The most qualified key person is a settler with extensive experience living in such areas (7 to 14 years) who can be involved in a variety of hobbies and activities, and, above all, treat all residents fairly.

(2015 年 5 月 8 日原稿受理, 2015 年 12 月 10 日採用決定)